I. 神奈川県内　a. 関東ローム層

（2）箱根多摩 TCu-1 テフラ 露頭剥ぎ取り標本

標本番号　KPM-NP 2
標本名　箱根多摩 TCu-1 テフラ 露頭剥ぎ取り標本
大きさ　幅 2.35 m, 高さ 3.85 m
重量　47.3 kg
形状、展示・収納状況　やや厚い絨毯状、短辺を軸として巻いて大型移動棚に収蔵
採集地　神奈川県小田原市曽我大沢
緯度・経度　N35°19'25", E139°11'21"
標高　126 m
露頭の種別と現状　菊川支流の自然露頭、現存
露頭面の向き、傾斜　E-W、70°S
堆積物の種別　降下テフラ（陸成層）
年代　MIS 8、Aso-1 の上位（TCu-1，町田・新井，2003）
採集作業者　森山哲和（考古造形研究所）
採集立会い者　笠間友博、山下浩之、石浜佐栄子
採集日　2007 年 2 月 2 日
関連文献等

笠間友博・山下浩之（2008）地層剥ぎ取り手法による箱根火山起源テフラの記載 : TCu-1, Km-3, TP, 鴨沢ローム層．神奈川県立博物館研究報告（自然科学）, (37): 23-30.

神奈川県立生命の星・地球博物館（2008）「特別展図録 箱根火山〜いま証される噴火の歴史〜」p.47, 72-73.

上杉　陽・畠山桐子・川上直樹・森本正子・由井将雄・立山美津子・水谷有子・小林ひろみ・関東第四紀研究会, 2000．多摩中部ローム層標準柱状図．関東の四紀 , (22) : 3-38.

解説　箱根多摩 TCu-1（Tm-2）は、箱根火山に最初のカルデラを形成させた（カルデラ形成期のはじまり）と考えられるテフラである。プリニー式噴火の降下軽石と引き続き発生した軽石流の堆積物からなる。採集対象とした降下軽石層には、下位より次の 4 つの fall unit が認められる（笠間・山下 , 2008）。

ｉ）下部スコリア層（層厚約 25 cm）

褐色〜灰褐色のスコリア層（最大粒径約 25 mm）で、最下部には層厚約 4 cm の白色軽石層（最大粒径約 20 mm）がある。スコリアには粒径変化による弱い成層構造が認められる。この fall unit は多摩丘陵では風化によって黄土色を呈する火山灰層として認められ、最下部の白色軽石層も保存されているところが多い。上杉ほか（2000）の「下部黒ザブトン帯」に相当する。

ii）中部黄白色軽石層（層厚約 2 m）

降下軽石層の主体をなす fall unit である。基底より約 25 cm 上位に岩片帯があり、これを境に 2 つに細分できる。基底部から岩片帯までは軽石の最大粒径約 8 cm、比較的淘汰がよい。岩片帯より上の部分は最大 18 cm に達する粗粒な軽石を含み、淘汰が悪い。この粗粒な軽石は粒子として取り出すことはできなかったため、標本には付着していない。上杉ほか（2000）の「中部軽石帯」に相当する。

iii）黄灰色火山灰層（層厚約 3 cm）

下位の中部黄白色軽石層と上位の上部青灰色軽石層の間には、火山砂質の火山灰層が存在し、両軽石層もこの火山灰層に接する部分は細粒である。このため両者の境界は漸移することなく非常にシャープで，このテフラの重要な特徴となっている。

iv）上部青灰色軽石層（層厚約 80 cm）

特徴的な青灰色の軽石からなる fall unit で、軽石の最大粒径は約 12 cm と下位の黄白色軽石層よりやや細かい。内部には特に細分できるような堆積構造は認められない。この部分も特に粗粒な軽石は、風化のため粒子として取り出すことはできず、標本には付着していない。上杉ほか（2000）の「上部青帽子帯」に相当する

なお、本標本では TCu-1(Tm-2) の下位 20 cm に、幅約 15 cm にわたって最大粒径約 1.5 cm の褐色スコリアが密集する部分がある。特に記載されているテフラではないため、So-a（曽我大沢 -a）と仮称した。

記録者　笠間友博

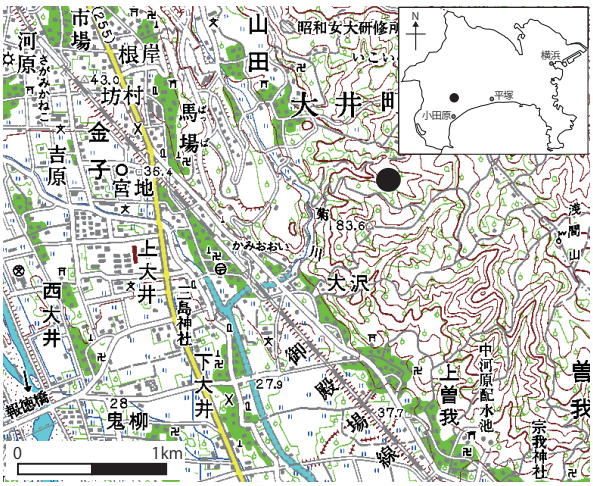
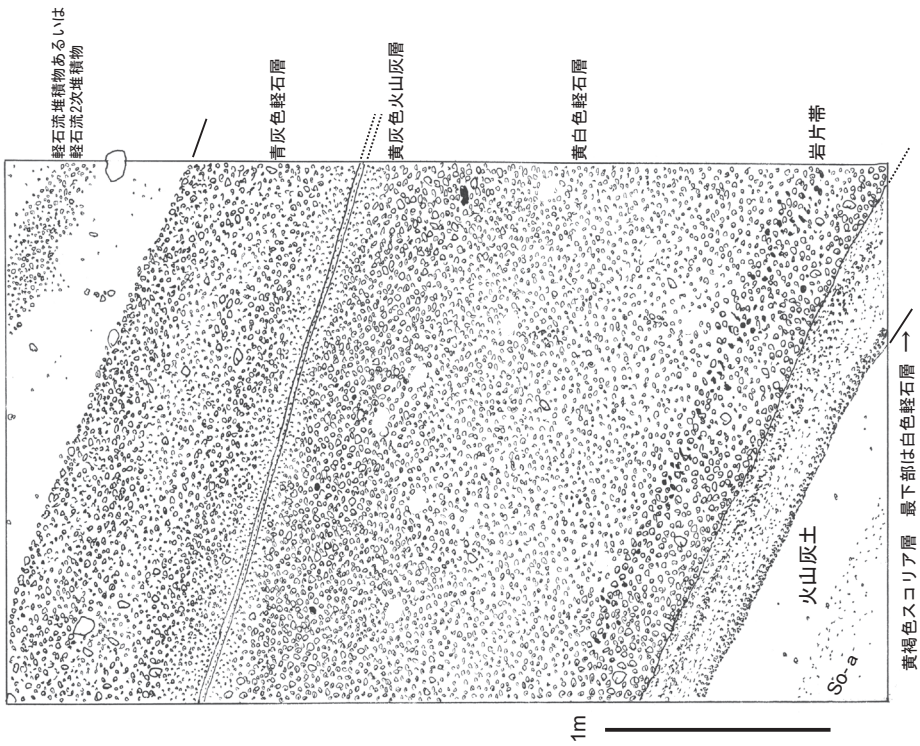


図 Ia-2-1. 採集地点（国土地理院発行の数値地図 50,000（地図画像）「埼玉・東京・神奈川」を使用）.

図 Ia-2-2. 剥ぎ取り標本の採集露頭.



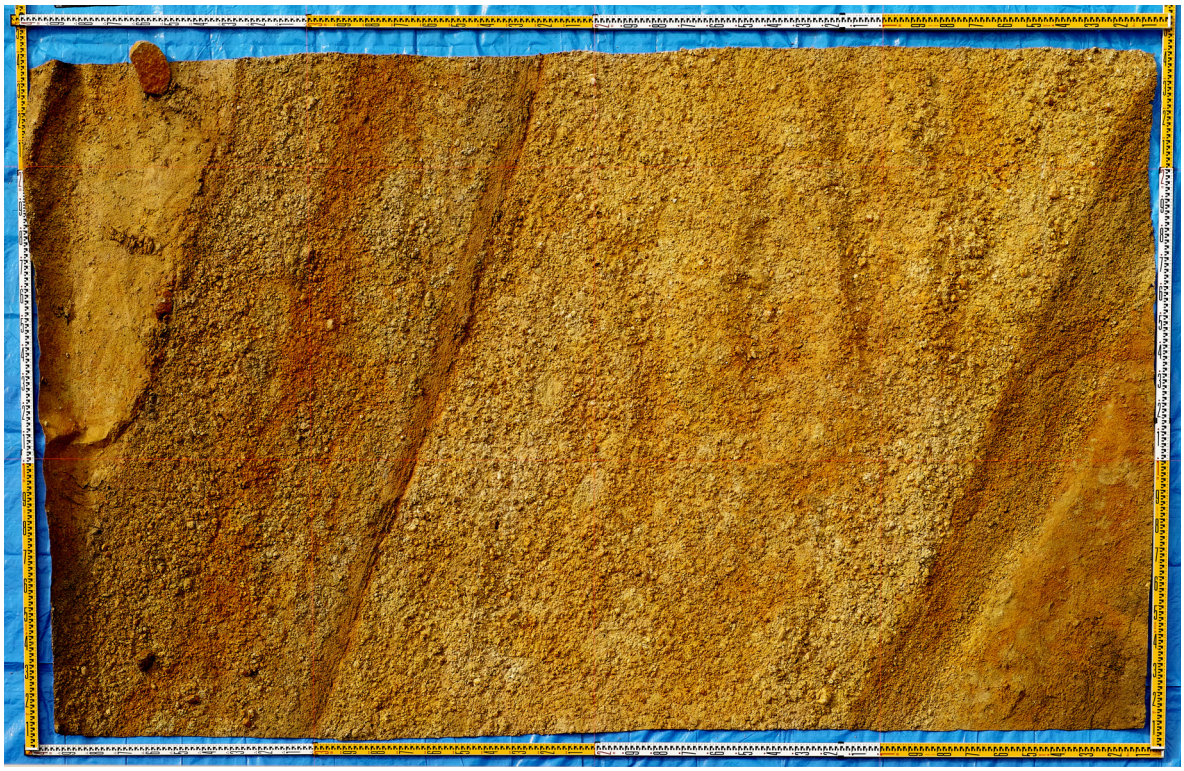


図 Ia-2-3. 剥ぎ取り標本の写真（左）とスケッチ（右，笠間・山下（2008））.

図 Ia-2-4. 剥ぎ取り標本の採集の様子.

図 Ia-2-5. 剥ぎ取り標本の展示の様子（右：KPM-NP 2, 左：KPM-NP 1-2）（2008 年度特別展「箱根火山〜いま証される噴火の歴史〜」）.